

庭園

大泉池

東西130間、南北80間、中に1島がある。

昔のまま保たれ橋脚遺跡も現存し平安時代の橋を知る唯一の資料となっている。池の中の橋ぎわに7.5.3.といわれる形式の石組や出島岬状の立石は平安時代の庭づくりを形式を知る上貴重である。また大泉池の西南隅から西方に第一、第二の築山があって嘉祥寺からみて庭景をなす。このように大泉池は平安時代の浄土庭園としてもはんだ的なものであり、学問上からも貴重な存在で特別名勝に指定されている。

舞鶴池の跡

観自在王院跡に残る典型的な浄土庭園

仏像・彫刻

金色堂諸仏（重要文化財）

中央壇上に定印の阿弥陀如来と観音・勢至の二菩薩を中心としてその両側に大地蔵、前方に持国・増長の二天が配され計11体をもって弥陀聖衆の来迎を表面している。これら諸仏は中央様式の典型を示してよく整い群像としての構成も統一されてその中に優美温雅な如来菩薩相と二天の忿怒躍動の調和は内陣の莊嚴に一段と光採を放っている。左右両壇の諸仏は中央諸仏に比しいくぶん写実味が加わり鎌倉初期の作風が現われている。これは60余年間の様式的変遷を示している彫刻史的意義が大きい。これら全諸仏はいずれも檜、椴材を用い寄木造り漆箔、粉溜彩色仕上となっている。

一字金輪仏（重要文化財）

一字金輪の彫刻仏として現存する唯一のもの木彫寄木造りで造仏手法上からも独特である。中尊寺の秘仏として多数の仏像中最も優秀な作品である。天災地変の時信仰をされた仏で目に玉をはめ頬や唇に紅をさしふっくらした豊かな肉付、人肌の大目如来と俗にいわれるように彩色も人肌のように藤原時代の美人の写真とさえ思える程写実的で官能的とさえいわれるほど人間的であり、しかもこの中に仏としての理智と慈愛をたたえている。秀衡の護持仏として金輪閣を建立しその本尊にしたと伝えられている。

阿弥陀如来像（重要文化財）

釈迦如来像（ " ）

薬師如来像（ " ）

千手観音像（ " ）

工芸・金工

金色堂や経蔵等の堂内の調度や法具類で優れた遺品として重要

螺鈿八角須弥壇（国宝）

経蔵の内陣におかれる本尊の台座、枝巧は華麗巧緻で詩絵の図案はその時代の好みをよくあらわしている。

螺鈿平塵案（国宝）

経蔵の仏器や経巻をのせた卓、さき脚形の脚は藤原時代の優雅な感じもあらわしている。なお金色堂内にも同じものがある。

木製漆塗りで甲板は入隅の長方形、側面は前後二個左右一個ずつの格狭間を透し、甲板、中框四の隅には金銅魚々子地宝相華唐草文毛彫りの金具を打つ。脚は断面五角形のいわゆる鷺脚で、脚の附根には葉状の齧を飾り、爪先に金銅猪目透し魚々子地宝相華唐草文毛彫り金具を付す。側面、脚の全面は平塵の地に宝相華唐草文の螺鈿を施しているがかなり脱落し彫痕をみせている個所が多い。

※螺鈿とは……

螺は貝、鈿は物を飾る意味で夜光貝、あわび貝などの真珠質の部分を取り平らに磨いて漆地に木地に装飾したもの
平塵とは齧粉を地にまばらに蒔き研ぎ出したもの。

螺鈿燈台（国宝）

経蔵に用いられるもの、頂上に油皿をのせる請け台がありこれを支える支柱の下に台がある。これも金平塵地に螺鈿で蝶・唐花などの模様があらわし形、飾りはすっきりしている。

螺鈿齧架（国宝）……金色堂、経蔵

木製、割形のある脚上に柱を立て阿端が鞍手の山形の梁木を乗せる。もとは平塵地螺鈿装であったが剥落がはなはだしく彫痕だけが残っている。鞍手先、夾金具は金銅魚々子地宝相華唐草文鋤彫りで花先は猪目透し、柱の根巻には金銅魚々子地宝相華唐草文鋤彫り花先猪目透しの四葉座に同文の立上り金具を設ける。

またこれに附属する孔雀文齧は鋳銅製で上下縁とも三弧からなり山形が高く、縁が厚い。図様は中央に入葉重弁を据え左右に相対する孔雀文を鋳出している。

※齧架

齧とは仏具の一種で鳴器として用いられるもの。

螺鈿礼盤（国宝）……経蔵

木製黒漆塗箱形の礼盤で上下縁を金平塵とし四隅及び中央に阿花先魚々子地宝相華文

鋳彫りの金銅金具を打ち、金具の間には螺鈿をおく。東間の羽目板もまた金沫懸地とし、四隅に螺鈿、中央に格状間を設け内に孔雀文打出し金具を鏡地に貼る。螺鈿はすべて脱落して彫痕のみとなり、沫懸地も僅かに残るだけで、下櫃金具等後補の個所が多い。孔雀文打出し金具の尾翼^{びり}透しの部分に緑三個、白二個の璃瑠玉が残存する。

木造天蓋(国宝)

金色堂三壇上に吊ってあった仏天蓋、木製、漆塗り金箔押しで彩色の痕がある。清衡壇のものが最も優れ中央の八葉座の外側はすべて宝相華唐草の透彫りとなって軽妙な美しい感じを与える。また三壇の年代の差がこの工芸品の上にも明らかに見られる。

金銅華鬘(国宝)……金色堂の須弥壇の装飾

金銅製団扇形で鋳彫りを加えた宝相華唐草文透彫りの地に打出しによる総角と鏡地板の光背を付した迦陵頻伽文を表裏両面から釘留にする。釣り金具は魚子地宝相華唐草文鋳彫り猪目透し四葉形座を重ね長円環つきの切子環合を打ち、同形のものが三枚ある。

金銅幡頭(国宝)……金色堂の須弥壇の装飾

総体に板金を宝相華唐草文の透彫りにし周囲に覆輪をとる。幡身の中央に華盤を奉持する打出しの天人を表裏から釘留めし四隅に八葉座小刻みつきの金具を付す。

孔雀文髹(国宝)……金色堂、千手院

のびやかな感じの孔雀の姿、金属とは思われない柔か味、精妙さが見られる。

鍍銅製上縁三弧、下縁二弧からなり山形は低い。中央に四花形中房を持つ八葉重弁の撞壺を据え左右に片足を曲げて相対する孔雀文を鑄出している。

遠画、書跡

書写一切経(国宝)

(1)紺紙金銀字文書一切経 15巻

紺紙に銀で界線をひき金字と銀字で1行おきに経文を書き写したもの、表紙は唐草の図案や説法の絵

(2)紺紙金字一切経

(3)紺紙金字千部一日経

これらの一切経が漆塗の美麗な経箱におさめられて経蔵に保存されている。

景勝王経経塔曼荼羅(重要文化財)

中尊寺供養願文(重要文化財)

平泉及び岩手県南部に関係のある文学

○芭蕉

三代の栄耀一睡のうちにして大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて金鶏山のみ形を残す。まづ高館にのほれば北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る康衡らが旧跡は衣が襦を隔てて南部口をさしかため、えぞをふせくと見えたり、さても義臣すぐつてこの城にこもり功名一時のくさむらとなる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、かさうちしきて時のうつるまでなみだを落としはべりぬ。

「夏草やつはものどもが夢の跡」

仙台に着いたころから毎日降るや降らずでさみだれのような天気だった。「奥の細道」の跡をたずねる旅だから、さみだれはゆかりがあると言えば言えないこともあるまいが——。山の道はぬかるので、あしだを借りて中尊寺までの道をほちほちと歩いた。芭蕉が上記の俳文中でいっている。

「大門の跡」とは、毛越寺の南大門の跡にちがいない。それは、大泉の池のほとりの草原に大きな礎石が三列になって十二個残っている。

平泉の駅から1、2町来て汽車の踏切を越した右側が秀衡のやかただった伽羅の御所の跡だったという。そこは今は町筋になっており前通りはわらぶき屋根の下でモーターを使って米をついている家や、トタン屋根の商店などが並んでいた。わたしは細い道をはいてみた。芭蕉も見たとおり「秀衡が跡は田野になりて」である。

高館の跡へは道は右手にはいるのだった。桃、グミなどの木が茂っている下に百姓家が1軒古い壁構えに麦を立てかけて干し、前には豆などの畑もある。そこをだらだらと登るとスギの木立の薄暗い道となるがやがて一つの展望台に出られる。からりとした明かるいながめである。東にやや速く離れて山という字のようにすわっている山が東稻山である。いかにも高館は要害の地形である。ここに義経はたむろしていた。だが頼朝の軍勢が平泉に迫ったとき秀衡の長男国衡と次男泰衡とは義経を討ち取って頼朝の恩賞にあづかるうとした。三郎忠衡は父の遺命を奉じて主と仰ぐ義経を助けた。高館の城は煙に包まれた。主従はともに滅びた。しかもその兵火はついに平泉全体を焼きはらい藤原氏の栄華は一朝の夢と化し去ったのである。「さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。国破れて山河あり城春にして草青みたり」と翁が嘆いたとおりである。

～(「奥の細道を尋ねて」より)